

*World's
Famous
Classics
56*

世界文学全集

Guy De Maupassant

UNE VIE, BOULE DE SUIF, SUR L'EAU, etc.

モーパッサン／青柳瑞穂 平田襄治訳

女の一生 脂肪のかたまり 水の上
ほか

世界文学全集——56

モーパッサン

1974年9月18日第1刷発行

訳者 青柳瑞穂／平田襄治

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



© KODANSHA 1974 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文3)

目次

女の一生	青柳瑞穂	7
脂肪のかたまり	平田襄治	233
短編	平田襄治	273
水の上	青柳瑞穂	303
解説 モーパッサンの人と作品	青柳 瑞穂	390
脂肪のかたまり他〈付・主要参考書目〉	平田 襄治	399
主要作品解題	稲 生 永	405
年譜	松 田 穰	408

写真撮影 稲生 永／本社写真部

装幀 アド・ファイブ

『女の一生』主な登場人物

ジャンヌ——ノルマンディー地方の田舎貴族のひとり娘。世間知らずで、夢見ごちのまゝ結婚生活にはいるが、夫に裏切られ、愛情を傾けたひとり息子にもそむかれ、幻滅とあきらめの一生をおくる。

ジュリアン——ド・ラマール子爵。貧乏貴族の孤児で、ジャンヌの美しさと財産に目をつけて結婚。美男子だが、野卑で打算的、その上好色で、女中に手をつけたり、近隣の貴夫と浮気を重ね、ジャンヌをかえりみない。

ル・ペルチュイ・デ・ヴォ男爵——ジャンヌの父。ルソーを崇拝し、自然を愛する善良な田舎貴族。

男爵夫人——ジャンヌの母。感傷的な夢想家で、心臓を病んでいる。

ポール——ジャンヌのひとり息子。あまやかされて育ち、成年後は放蕩して母をかえりまない。

リゾン叔母さん——男爵夫人の妹。薄幸な老嬢。

ロザリイ——ジャンヌと乳姉妹だった女中。ジュリアンに誘惑されて男の子を生み、主家から追いだされるが、のち孤独なジャンヌを助ける気丈な女。

ド・フルヴィル伯爵——近くに住む貴族。粗野だが、気のいい愛妻家。妻とジュリアンの情事を知り、二人を谷底へつき落とす。

ジルベルト——伯爵の妻。派手好きで、ジュリアンと密会中、夫に殺される。

トルビアック神父——狂信的な若い司祭。

女の一生

小つぽけな真実

青柳瑞穂訳

ブレンヌ夫人に捧ぐ

忠実な友としての敬意の念を表し、あわせて
今は亡き友の思い出のために

ギ・ド・モーパッサン

—

ジャンヌは荷づくりをすまずと、窓のところに行つてみたが、雨はまだやんでいなかった。

大雨は、夜どおし、窓ガラスや屋根を鳴らして、降りつづけたのだった。水気をふくんで、低くたれこめた空は、裂けてもして、地面にすっかり水を流し込みでもしたのか、地面をお粥のようにどろどろにし、砂糖のように溶かすのではないかと思われた。突風が重苦しい熱気をふくんで通り過ぎて行く。氾濫した溝のたてる音は、人通りのない往来に鳴りわたるのだったが、その往来ぞいの家々は、まるで海綿のように湿気を吸いこめば、湿気は家の中にまで浸入し、穴倉から屋根裏まで壁に汗をかかせていた。

ジャンヌは、きのう修道院の寄宿舎を出てきたばかり、ようやくと永久に自由な身になったわけで、彼女があんなに長いこと夢想してきた人生の幸福も、手さえのばせばことごとくとらえられるようになったのだ。それなのに、もし天気がよくならなければ、父が出発をちゅ

うちよするのではないかと、それが心配でならなかった。だから、これで朝から百べんも、空模様をうかがつて見ずにはいられなかった。

そのうち、彼女は旅行カバンにカレンダーを入れるのを忘れてることに気がついた。そこで彼女はその小さな厚紙を壁からはぎ取った。このカレンダーは、月々によつて仕切られていて、模様の中央に、今年の年号が、一八一九年と、金文字でしるされていた。それから、彼女は最初の四段を鉛筆で消した。つまり聖者の名前にひとりひとりバツテンをつけていったわけで、こうして五月二日までできた。これが彼女の修道院を出た日なのである。

ドア越しに、ひとつの声が呼んだ。

「ジャンネット！」ジャンヌは答えた。

「パパ、どうぞ」すると、そこに父親があらわれた。

シモン・ジャック・ル・ペルテュイ・デ・ヴォ男爵は、前世紀の貴族ともいふべく、変わり者で、お人よしだった。ジャン・ジャック・ルソオの熱烈な崇拜者で、

自然や田園や森林や動物に対して、恋人のような愛情を抱いていた。生まれが貴族だけに、本能的に九三年

(一七九三年。大革命の恐)を憎んではいた。だが、氣質的には哲學者(哲學者という一般的な意味ではなく、十八世紀のフランスの哲學者)の哲學者に對して多少の嘲笑をこめて与えられた名稱であり、受けた教育からは自由人であつたので、専制政

治は嫌悪していた。もともと、その憎み方は、毒にも薬にもならないような、口先ばかりのものではあった。男爵の力点でもあり、弱点でもあるのは、その善良さであった。愛撫したり、恵み与えたり、抱きしめたりするのは、二本の腕では足りないといった善良さであった。造物主的な善良さ、散漫な、抵抗力の欠けた、意志の神経が一本麻痺しているようなもの、エネルギーのどこかに穴があいているようなもの、これは要するに一種の悪徳にちかいものだった。

理論の人である彼は、娘の教育にはちゃんと計画を立てていた。彼女を幸福な、善良な、正しい、やさしい女に育てたいと思ったからだ。

彼女は十二の歳まで家にいたが、母親は泣いて悲しんだにもかかわらず、聖心修道院の寄宿舎に入れられた。

父親はそこに娘を嚴重に閉じこめておいた。世間からへだて、人からも知られず、人の世のことも知らさずにおいた。こうして、十七になったら純潔のまま自分に返してもらおうというわけで、そして、今度は自分の中に浸すつもりだった。そして、田野を歩きながら、みのりゆたかな土地のまん中で、そぼくな恋の姿や、動物たちの單純な愛情や、生命の明朗な法則に触れさせて、娘の魂をひらいてやり、その無智を解いてやろうと思ったの

だった。

こうしていまや彼女は、生命力にあふれ、幸福を求めて、顔をかがやかせながら、修道院から出てきたのである。昼の間の所在なさに、長い夜のつれづれに、また、希望ばかりが去来する孤独な生活の中で、彼女の心がこれまでで何度となく描きつづけてきたあのすべての歎びも、あの魅力的なすべての偶然も、今ではもう彼女のものになろうとしているのだ。

彼女はヴェロネーゼ(十六世紀のイタリアの画家)の描いた肖像画そっくりだった。そのつややかなブロードの髪の毛は、はだの色と溶けてしまったのではないかと思われるほど。そのはだは、かすかにバラ色がかって、貴族娘特有のもの、陽光を受けた時などに、ほのかにそれと見える青白いピロッドとでもいうような、うすい産毛うぶげでばかされていた。眼は青かった。陶製のオランダ人形の眼のもつ、あの不透明の青だった。

左の小鼻のそばに小さなホクロが一つあった。右にも一つ、これは額の上にあった。そのまわりには、皮膚とほとんど見分けのつかないほどの毛が二、三本ちぢれていた。背は高かった。胸は豊満、胴の線は波うつていた。ハッキリと響く声は、ときにかん高いほどだった。しかし、そのほからかな笑い声は、まわりに歓喜の気分を呼び起こした。いつもの癖ながら、髪でもなでつける

ように、両手をコメカミのところへ持つていった。

彼女は父親のそばにかけよると、抱きしめながら接吻して、言った。

「ねえ、行くんでしょ？」

父親はにっこり笑った。すでに真っ白になっている、その長くのびた髪を横に振ってから、手を窓のほうにさしのべながら、

「こんな天気には旅行だなんて、どうして？」

しかし、彼女は甘ったれた声を出して、せがんだ。

「だって、パパ、行きましょよ、おねがい、午後になれば、きっと天気になってよ」

「だって、かあさんがなかなか承知しまいよ」

「そのことなら、あたしにまかせて」

「お前がかあさんをなんとかしてくれば、わしのほうはかまわがね」

すると、彼女は男爵夫人の居間に向かって突進した。

この出発の日を毎日待ちに待っていたからである。

聖心修道院に入ってから以来、彼女はルーアンの町をはなれたことはなかった。父親が自分のきめた年齢になるまでは、彼女にどんなレジャーもゆるさなかったのである。ただ二度だけ、パリにつれて行かれたことはあった。しかし、それはやっぱり都会だった。彼女の夢みているのは田園でしかなかった。

今度という今度こそ、彼女は一夏をレ・プールの屋敷ですごそうとしているのである。これは祖先伝来の古風な屋敷で、イポールにちかい断崖の上に建てられていた。で、彼女はこの海浜での自由な生活に、無限の歓びを期待していた。それに、この邸宅は彼女の名義になっているもので、結婚したら、ずっとここに住むことになっていた。

が、だから、昨日の夕方から小止みなく降りつづけている雨は、彼女の生涯での、最初の大きな悩みであった。だが、ものの三分もすると、彼女は母親の部屋からとび出してきて、家じゅうに響きわたるように叫んだ。

「パパ、パパったら！ ママンはいいって、さあ、馬車の用意よ」

豪雨はいつこうにおとろえそうもなかった。それどころか、四輪馬車が玄関の前に現われたころには、倍加したのではないかと思われた。

ジャンヌが馬車にとび乗ろうとしているところへ、男爵夫人が階段をおりて来た。からだの一方を夫に支えられ、もう一方は、青年のように姿勢のいい、頑強そうな大柄の小間使いが受け持っていた。コー地方生まれの、生っ粋のノルマンジ娘で、じっさいはせいぜい十八くらいであつたろうに、すくなくとも、はたちには見えた。この家では娘分のあつかいを受けていた。それというの

も、ジャンヌと乳姉妹だったので。ロザリイという名前だった。

といつても、この娘のおもな役割は女主人の歩行を助けることだった。女主人は、この數年来、不平のたえまのない心臓肥大症のため、すっかり肥満体になっていたのである。

男爵夫人は、息をはずませながら、古びた屋敷の玄関前の石段のところまでたどり着くと、雨水がまるで小川のように流れている庭を眺めて、呟いた。

「これはこれはおどろきましたね」

夫は相かわらずニコニコしながら、答えた。

「でもあんたじゃない、行こうといったのは、アデライド夫人」

彼女はアデライドなどというもののいい名前を持っていたので、夫はちよつとからかい気分で尊敬の念さえこめて、いつも《夫人》をつけて呼んでいた。

それから、彼女はふたたび歩き出し、やつとの思いで馬車に乗ったが、とたんに馬車のバネがいつせいに曲がった。男爵がそのわきに腰かけ、ジャンヌとロザリイは後ろ向きの座席に場所をとった。

炊事婦のリュジヴィーヌが外套の束を持ってきたので、みんなはそれを膝の上にのせた。つぎに籠も二つ持ってきたので、今度はそれを脚の下にかくした。それ

がすむと、炊事婦は馭者台によじのぼり、シモンじいさんのわきに坐つて、大きな毛布を頭からすっぽりとかぶった。門番夫婦が門を閉めようと見送りにやつてきた。そして、荷車であとからやつて来るはずの荷物について最後の注意をうけた。さてそこで出発だった。

馭者のシモンじいさんは、頭をひくくさげ、雨の中で背中をまるくしながら、三枚襟の外套にくるまっていた。突風は唸りながら窓ガラスを打ち、道路を水びたしにしていた。馬車は、二頭の馬の全速力で、勢いよく河岸通りに降りて、大型船の列と平行して進んだ。船のマストや帆げたや綱具は、葉の落ちた樹木のように、雨空にわびしそうに突っ立っていた。それから、馬車は、モン・リブーデの長い大通りにさしかかった。

まもなく、いくつもの牧場をよぎった。ときどき、水びたしの柳の影が、死骸のように枝を垂れて、水煙の中にぼんやり浮かんで見えた。馬の蹄鉄は泥水をはねあげ、四つの車輪は泥の輪と化した。

みんな黙りこくつていた。精神状態までが地面と同じように濡れているように思われた。かあさんは、後ろに寄りかかり、頭をもたせて、まぶたを閉じた。男爵は、濡れそぼった、単調な田野を、ものうげな目で眺めていた。ロザリイは、膝の上に荷物をのせたまま、下層民特有の、あの動物的な夢見心地で、物思いにふけってい

た。しかし、ジャンヌばかりは、このなまぬるい雨の中にいると、まるで閉じこめられていた植物を風にでもあてたように、よみがえって来るのを感じずにはいられなかった。歓喜の壁が、木の葉の茂みのように、彼女の心を憂鬱から保護していた。物こそいわなかったが、声を立てて歌いたかった。外に手を出して、てのひらにたまる水を飲んでみたかった。そして、馬の疾走にこうして運ばれていることが、荒涼たる風景を眺めていることが、この洪水のただ中にあっても自分は安全だと思ふことが、彼女にはうれしくてならなかった。

降りしきる雨の中で、二頭の馬の濡れて光っている尻が、汗をかいていた。

男爵夫人はうとうとと眠っていた。六本のたれさがった規則正しいらせん形のまき毛にふちどられている彼女の顔は、首のまわりの三つにくびれた太い波形のたるみで力なく支えられながら、少しずつ、傾いていくのであったが、その首の最後の波のうねりも、胸の大海の中に消えてゆくと思われた。その頭は、息を吸う毎にもちあげられ、持ちあげられたと思うと、またがつくりもたれる。頬はふくれあがり、半開きになった唇からは、大きないびきの音がもれてくる。夫は彼女のほうにかがんだと思うと、彼女がそのゆたかな下腹の上で結んでいる両の手の中に、革製の小さな財布をそっとおいた。

手をさわられて、彼女は目をさました。そして、眠りを中断された人特有の朦朧状態で、その品物をぼんやりした目で眺めた。財布は落ちて、口をあけた。金貨や紙幣が馬車の中にちらばった。彼女は完全に目をさました。それがおかしいと、娘は笑いを爆発させた。

男爵はお金をひろい集め、彼女の膝の上にのせると、言った。

「さあ、これで全部ですよ、エルトの農場から得たお金のね。あの農場を売ったのも、レ・プールの屋敷を修繕するためだったんで。なにしろ、わしらもこれからは、あそこにしよっちゅう住むことになるんだから」

彼女は六千四百フランを数えると、そっとポケットにおさめた。

それは彼らの両親が遺してくれた三十一カ所の田地のうちで、このようにして売られた九番目の農場だった。それでも夫妻はまだ地面でおよそ年二万リイヴルの上がり高を持っていた。これは上手に管理さえすれば、年に三万フランを上げることが容易であつたろう。

夫妻は簡素な暮らしをしていたので、もしも家の中にいつも口をあけている底なしの穴、善良さ、という穴がなかったならば、これだけの収入で充分であつたろうと思われた。善良さは、太陽が沼地を干あがらせるように、彼らの手からお金を干あがらせていった。お金は流

れて行つた。逃げて行つた。消えて行つた。どういふ風にして？ それは誰も知らなかつた。しよっちゅう、夫妻のうちのどちらかが、こんなことを言つた。「どうして、こうなつたのかわからないけれど、きょうも百フラン使いました。べつにたいした買ひ物もしなかつたのに」

ともかく、この気軽にものを与えることができるというのは、夫妻の大きな幸福の一つであつた。そして、この点に関しては、この感動的な、すばらしいやり方で、彼らはおたがい了解し合つていた。

ジャンヌが訊ねた。

「あたしのお家つて、今じゃ、きれいになつたの？」

男爵は楽しそうに答えた。

「それは見ればわかるさ」

豪雨の烈しさも、すこしずつおさまつてきた。やがてはそれも狭霧きさきのようなもの、舞い狂うごく微細な糠雨にすぎなくなつた。雲からなる円天井が高くなり、白ずんできたように思われた。と、突然、これまで見えもしなかつた穴が雲にひとつできて、そこから、太陽の長い光線が、さつと斜めに牧場の上にさしてきてきた。

そして、雲が裂けたので、天空の青い地が現われてきた。すると、その裂け目は、まるで帳がひきちぎれるみたいに大きくなつていった。するとそこに、目のさめる

ような、深々とした、紺碧をたたえて澄んだ青空が下界の上にひろがつた。

すがすがしい、甘い微風が、大地の幸福な吐息でもあるように、吹きすぎた。馬車が庭園や森にそつて進んでいる時などは、羽根をかわかしている小鳥のせわしいさえずりも聞こえてきたりした。

夕暮れが迫つてきた。車中の人たちは、もうみんなジャンヌをのぞけば眠っている。二度ばかり宿屋の前で停まつたのも、馬に一息つかせ、燕麦と水を与えるためだった。

太陽はとくに沈んでいた。鐘の音が遠くでしている。ある小さな村に入つたとき、馭者はカンテラに火を入れた。空もまた降るような星で照明された。燈火のついた家々が、ところどころに現われ、火の一点となつて、闇を貫いて見えた。と、いきなり、小山の背後から、樅の木立ちごしに、月が、真つ赤な大きい月が、まだ眠りからさめやらぬように、ぼつかり浮かんだ。

あたかだつたので、窓ガラスをおろしておいてもよかった。ジャンヌは、夢想につかれ、幻想にもあきて、今では休息している。同じ姿勢を長くつづけていることのしびれのため、ときどき彼女は目をあける。そして、外を眺める。明かりのさしている夜の中を、農家の木立ちがすぎて行つたり、あちこち、畑にねそべっている牡

牛が首をもたげたりするのが見えたりする。それから、彼女は新しい姿勢をとうとうといろいろやってみて、見かけた夢をもういちどとらえようと試みたりした。しかし、たえない車のとどろきが耳について、思念はつかれるばかり、ふたたび目をとじたが、心もからだのようには疲れているのを感じずにはいられなかった。

そのうち、車が停まった。男や女たちが、めいめい手に提灯を持ちながら、馬車の昇降口の前に立っていた。到着したのだ。ジャンヌはびっくりして目がさめ、大急ぎで飛びおりた。父親とロザリイは、ひとりの小作人に足もとを照らしてもらいながら、男爵夫人をまるで荷物のように運んで行った。運ばれながらも、すっかり疲れている夫人は、苦痛を訴えながら、たえ入るような小さな声で「おお！　ありがとう、ありがとう、みなさん！」と、くり返すだけだった。彼女は飲むものも食べるものも欲しがろうとせず、床につくなり、そのまま眠ってしまった。

ジャンヌと男爵は、さしむかいで夕食をとった。

ふたりは顔と顔を見合せてはニコニコ笑いながら、食卓ごしに手を取りあったりした。そして、ふたりとも子供っぽい欲びにとらわれ、修繕のできた屋敷の検分をはじめた。

それはノルマンジ独得の、農家とも城館ともいえるよ

うな、軒の高々とした、宏大な屋敷のひとつだった。白い、といっても今では灰色にさびた石の建物で、大家族を収容するにたる広さだった。

長大な玄関兼廊下が家を二つに仕切りながら一端から一端に通っていて、前後両方の正面に、それぞれドアが大きく開いていた。左右二つの階段が、この入り口を跨ぐような恰好になって、まん中に空洞をつくり、二階でその二つの昇り口が出会って、ちょうど橋のようになっていた。

一階は右手が、途方もなく大きな客間で、小鳥のむれ遊んでいる木の葉の茂みを織り出した壁掛けがはりめぐらされていた。細目針の刺繍で張られた家具類は、どれも全部、そっくりそのままラ・フォンテーヌの「寓話」の挿し画だった。ジャンヌは、自分が子供のころから大好きだった椅子を見出だして、ぞっとするほどのうれしさをおぼえずにはいられなかった。それにはあの狐と鶴鳥の物語が描かれていたからだだった。

客間のとなりは、古い本がぎっしりつまっている図書室と、それから、二つの、今では使っていない部屋だった。左側には、新しく板を張りかえた食堂、下着類置き場、配膳室、炊事場、それに浴槽のおいてある小さな部屋だった。

二階は、一本の廊下が全体を縦に切っていた。十部屋

の十個のドアが、この廊下に面して一列に並んでいた。その右側の、いちばん奥が、ジャンヌの部屋だった。ふたりはそこに入ってみた。男爵は最近この部屋を模様替えしたばかりだった。といっても屋根裏にしまっておいた壁掛けと家具をあらたに利用したまでのことではあった。

オランダできの、古い古い壁掛けに描かれた多くの異様な人物たちが、この部屋をいっぱいにしていた。

しかし、そこに彼女の寝台を見つけると、若い娘は歓喜の叫びを思わず発した。その四隅に刻み出されている、櫨材の四羽の大きな鳥が、真っ黒に、蠟光りして寝台を支えているのは、まるでその番人でもあるような恰好だった。寝台の両側面には、花と果実の飾りが刻まれている。そして優雅な丸溝の彫られた四本の柱は、コリント式の柱頭をいただいて、バラの花とキュピッドの絡まった蛇腹を支えていた。

その寝台は、まるで記念建造物かなんかのように立っていた。用材は、長の年月をへて厳然と黒光りしていたが、それでも優雅な趣を保っていた。

寝台の足掛け蒲団と天蓋は、二つの天空のように輝いていた。両方とも、濃紺の古代絹で作られていたが、金糸で縫った大きな百合の花がところどころに星のように輝いていた。

ジャンヌは、自分の寝台を充分に堪能すると、今度は明かりをにかけて、壁掛けをしらべ、意匠の画題を理解しようとした。

若い領主と若い貴婦人のふたり、それが緑と赤と黄という、世にもふしぎな衣裳をまとって、白い木の実のなっている、青い木かげで語り合っている。木の実と同じ色の大きな兎が、灰色の草を少しばかりかじっている。

人物のちやうど真上に、これが遠景ということになるのだろうが、光った屋根の、丸い家が五軒ほど見える。その上に、ほとんど空の中に、真っ赤な風車が見える。花のついた大きな枝葉模様が、これら全体の構図の間をはいまわっている。

つぎの二つの壁掛けも、前のと非常によく似ている。ただちがうのは、オランダ人風の衣裳をつけた四人の小人の老人が、家から出ようとしているところで、それが極度の驚きと怒りを示して、天に腕をさしのべているのである。

ところで、最後の壁掛けは、ひとつの悲劇をあらわしている。相かわらず草をかじっている兎のそばに、若い男が死んでいるらしく、倒れているのである。若い貴婦人はそれを見て、われとわが胸に剣を刺している。そして、木の実は黒くなっている。